いじめ問題に対応するスクールソーシャルワーカーの役割について
ーいじめ防止プログラムの効果検証と対話マニュアルの作成ー

牧野　晶哲

報告

Ⅰ．研究の背景と目的

全国の地方公共団体ではいじめ対策推進に関する計画と共に、いじめ対策を含めた専門職の採用を活発化させている。その一環として、スクールソーシャルワーカーの増員が図られている。

しかし現在のところ、いじめ対応に関わるスクールソーシャルワーカーの役割は明確に示されておらず増員のみの強調、そして早期発見・早期対応の文言だけが散見されている。昨年度に引き続き、ソーシャルワークの価値や倫理を踏まえたいじめへの対応方法として修復的対話（Restorative Justice）の理念と手法に着目し、実践を行い、効果検証をおこなう。また昨年の実践を踏まえた学会報告を行ったり、シンポジウムを開催するなど、さらなる普及を目指すことも本研究の目的である。

Ⅱ．本研究の実践報告

本研究においては学校側や関係者の理解及び協力を踏まえたうえで、①コンファレンス、②RJサークル[注]、の２つの実施を想定している。ただし①のコンファレンスは、いじめの加害・被害の関係が認められ、なおかつ互いに関係修復に向けた意思が確認でき、関係者の参加の同意がない限り実施することはできない。実際に、期間中にコンファレンスの依頼はなかった。②のRJサークルについては、学校側の意向も踏まえた上でスクールソーシャルワーカーとともに複数回実施することができた。

ここでは、昨年度中に実施したRJサークルの実施報告のほか、普及促進を図るためのシンポジウムや、学会等における報告についても概要を示す。

注）通常は「サークル」と称するが、修復的対話に基づくサークルであるため「RJサークル」と表記している。

(1) A県B小学校

スクールソーシャルワーカーの仲介もあり、B小学校において過去４年にわたり道徳の授業を使い、いじめ予防を含めた人権教育に取り組んでいる。昨年からはRJサークルも取り入れ、クラス内での自己表現や他者理解の機会を設けている。今年度も従来のプログラムに加え、RJサークルを取り入れた授業を展開した。

日時：2016年11月７-８日（１クラス当たり２時限使用）

対象：小学校４年生２クラス（11/7）、小学校３年生２クラス（11/8）

内容：「子どもへの暴力防止プログラム」

(2) B県C小学校

教育センターからの要請に基づき、様々な課題を抱えている小学校の学年においてスクールソーシャルワーカーとともにRJサークルを実施した。これまでは年に数回であり期間が空いての実施であったが、特定の課題を抱えるクラスであり、なおかつ短期集中的に入る経験は初めての実践となった。子どもたちの反応の移り変わりなど含め、新たな課題と可能性を感じることのできた実践となった。

日時：2017年１月12、19、25日（１クラス中１時

限使用）
対象：小学校６年生２クラス
内容：RJ サークルプロジェクト（１回目:「安心」、２回目：「自己理解」、３回目：「尊重」）

（3）学会等発表

第12回全国 RJ 交流会において、昨年度実施した私立学校における結果報告を行った。
日時：2016年６月
会場：早稲田大学
発表：牧野晶哲　他
（コーディネーター　山下英三郎）

修復的対話は、元々は司法分野で取り入れられたこともあり、会場には弁護士や法学者が大半を占めている。そのような中で、学校においての RJ サークル実践は異質であるが、多くの方に関心を示していただいた。報告時間を超過してまでご指摘ご助言をいただき、今後の可能性についても見いだすことができた。

（4）シンポジウムの開催

「困難を生きる子どもたちをいかにサポートできるか　－いじめ・暴力・社会的排除をめぐって－」を以下の日程で開催した。
日時：2016年９月13日　19:00-21:00
会場：早稲田大学３号館
参加：65名

シンポジウムには、西鉄バスジャック事件被害者でもある山口由美子さん、広島連続保険金殺人事件の当事者家族である大山寛さん、『ライファーズ』『トークバック』などのドキュメンタリー映画監督である坂上香さんをお迎えし、いじめや排除が始まる経緯とその後の思考や生活などお話いただいた。それぞれの体験や取材を通してのお話から、いじめや排除の構造、そして被害の深刻さを理解することができた。またこのような深刻な状況から脱するに至った経緯やキーパーソンの関わりの中から、支援者として求められる在り方を模索した。被害者構造・加害者構造の中から脱することで相手との関係修復に向かうことができるが、現在の行政による職域ごとの分業支援体制だけでは困難を抱えている方の本当の支援につながらないことも多い。そのような意味では、専門職の覚悟と、人間的な繋がり合いという曖昧な部分（価値・理念）の重要性が浮き彫りにもなった気がする。

参加者はスクールソーシャルワーカーや福祉専門職だけでなく、教育関係者、司法関係者、市民活動家などにご参加いただけた。時間の関係で参加者が直接質疑する機会はなかったが、グループ討議を通してシンポジストのお話を深めることができた。

Ⅲ．今後の展開

RJ サークルについては、本助成金以外にも多数の実践をしており、次年度以降も多くの学校で継続することとなる。子どもたちからのアンケートを継続して行うと同時に、教職員に対する聞き取り調査を並行して行い、修復的対話の効果を明らかにしていく。ただし授業内で実施することから、子どもへの同意形成や確認が困難である。そのため効果検証を報告するのは、上記課題が解決した後になる。まずはこれまでの実践を踏まえ、スクールソーシャルワーカーが学校で RJ サークルを実施するためのツールキッドについてまとめることにしたい。